

[新収品紹介]

ちゅうしょう ず かん おう き ようしん
 「聴松図巻」王翬・楊晋合作 清・康熙39年(1700)作
 絹本着色 25.8×135.9cm

この画卷は、清初の四王呉惲のひとり王翬とその弟子楊晋による作品で、聴松図という題を持ち、康熙39年(1700)に制作されています。松風の音を聴く人物が画面中央に配されており、自然景を伴った肖像画です。像主は明記されていませんが、当時の名門の一族で宋至という文人であろうと推定されています。

四王呉惲とは、清時代(1644-1911)初期の六人の文人画家のことで、王時敏(1592-1680)、王鑑(1598-1677)、王翬(1632-1717)、王原祁(1642-1715)の四人の王姓の画家に呉歷(1632-1718)、惲寿平(1633-90)の二人を加えてこう呼びます。この六人は互いに交流がありました。

王翬は、字を石谷、号を耕烟散人、鳥目山人、劍門樵客などといい、虞山(江蘇省常熟)の人です。文人の家に生まれ、幼いときから画を学びました。二十歳頃、王鑑に見出され、また王時敏について江南地方の收藏家を訪ねて古画を見る機会を得ました。古画の学習は重要なことであり、伝統を尊ぶ文人画家にとって歴代の名蹟を実際に見ることは大きな意味があります。王翬は、こうした経験を踏まえ、南北二宗を統合した独自の様式を打ち立てました。それは文

人画家の様式としては、技巧的で写実を重視したものでした。四王呉惲のなかでは最も専門画家に近く、精力的な活動を続け、現在も多くの作品が残っています。彼の下には多くの画家が集まり、その一派を出身地にちなんで虞山派といい、楊晋はその筆頭でした。

楊晋(1644-1728)は、字を子鶴、号を西亭、野鶴、鶴道人などといい、王翬と同じく虞山の出身です。師と共に制作することが多く、北京にも同行し、康熙帝の勅命を拝して制作した『聖祖南巡図』にも協力しています。このとき清朝内府收藏の古画の模写を行ないました。王翬の山水画中の人物、建物、車馬、牛羊などは、楊晋がしばしば補って描いたと言われています。

聴松図巻に話を戻しましょう。画面右端に「聴松図」の墨書とそれに続けて「耕煙外史」の印があり、王翬の手による題名とわかります。左端の二行の落款は、右が楊晋のもので「楊晋写照」の墨書と「楊晋之印」「子鶴氏」の二印、王翬のは「康熙庚辰六月既望劍門樵客王翬布景」の墨書と「王翬之印」「石谷」二印です。師の王翬が先に款署し、それに合わせて楊晋が署名したのでしょうか。

“写照”とは人物の姿を写す、肖

像を描くということの意味し、“布景”とは風景を配置することです。この図の人物は楊晋が担当し、周囲の自然景は王翬が描いています。画題別に画家の専門化が進んだ中国絵画においては合作の事例は唐時代より見られます。肖像画における合作の遺品の古い例としては、元時代の王繹・倪瓚合作「楊竹西小像」(1336年、北京故宫博物院蔵)が知られています。

王翬はこの聴松図巻の3年前にも、当時の肖像画の第一人者禹之鼎(1647-1709?)と「聴泉図巻」(南京博物院蔵)を合作しています。こちらは泉の音を聴く高士を描き、同じく自然と親しむ人物の画です。構図や周囲の松林などが聴松図巻とよく似ており、王翬は自然を背景とする人物画のパターンを確立していたことがわかります。

次に、この肖像の主について述べます。

聴松図巻には、光緒13年(1887)2月25日の日付をもつ翁同龢(1830-1904)の題と跋が付属し、像主について考証してあります。それによると翁の友人の徐郁(1836-?)が手に入れたとき既に題識などは失われ、わずかに宋商丘と書いた題箋が残っていたということです。翁はこれを手がかりに考証し、この図は宋至の45歳の像であると結論しています。この説は現在でも認められます。

宋至(1656-1726)は、清初の大收藏家宋荦(1634-1713)の次男で、この画が制作された3年後の康熙42年(1703)に進士に及第しています。

字は山言といい、書に巧みで、詩も善くし、著に「緯蕭草堂詩」があります。宋家は河南商丘の出身で、明時代以来、何代にもわたって高官が輩出しています。宋至も、この画に描いてもらった当時は、科擧の試験を受けるための勉学中で、江蘇巡撫(江蘇省の長官)を勤める父に従って蘇州に居ました。

題名の聴松図より、この画は蘇州に近い無錫の町の西郊にある恵山寺の景色を描いているという指摘があります。恵山寺には唐時代の書家李陽冰が聴松と書いた碑があって、聴松寺とも呼ばれていました。明時代以後は文人たちの集う所となり、宋荦も恵山寺を援助しています。

王翬と宋荦・宋至父子の交流を示す作品が何点か残っています。

聴松図を制作した同じ月に、王翬は宋荦のために蘇州の別荘滄浪亭を描いています。現在、南京博物院に蔵されるこの画卷は「滄浪亭図」という題字や款記の配置と体裁が聴松図巻に酷似しています。また、前年に描かれた「雲溪草堂図巻」(台北・国立故宫博物院蔵)には宋荦の題と宋至の跋が伴っています。そして、上海博物館にある四場面からなる山水図巻は、制作年は不明ですが、各図に宋荦の五言古詩が対として付属し、宋至の收藏印も画に捺されています。四図のうちの一つは滄浪亭の図です。

宋至の肖像画は本図以外に、蘇州出身の柳遇という画家が描いた作品が「微雨鋤瓜図巻」の名で南京博物院に現存します。康熙40年(1701)の年記があり、農夫の姿をした宋至は、聴松図と異なり髭を生やしていますが、顔かたちはよく似ています。

最後に、聴松図の伝来についてふれておくと、19世紀末に徐家に入った後、今世紀の中ごろ中国国民党の軍事指導者張学良(1901-)の手に帰し、昨年、大和文華館の藏品となりました。

(藤田伸也)

同(落款) 聴松図巻 王翬・楊晋筆

